

# 歌に思う

奥村 きみ子

中央五丁目

「勝ち抜く ぼくら小国民

天皇陛下のおんために

死ねと教えた父母の

赤い血潮を受け継いで——」

「出て来いニミッツ マッカーサー

出て来りや地獄へ逆落とし——」

大きな声で上級生の後を真似て歌いながら一列に並んで登校していた。

二〇年六月二九日深夜、警報サイレンも鳴らず空襲に会い、

岡山市で小間物百貨店をしていた我が家も焼け出された。家族に叩き起こされ、火の中を防空頭巾を被り逃げた時の恐ろしさは忘れられない。

一時、茶屋町の親類に避難した後、大和の祖母の弟の家に疎開するため、暗くした夜行列車に乗っていた時、皆々が広島の新爆弾の恐ろしさをひそひそと話していた。「岡山で良かったね」とも言われた。

高市郡船倉村で敗戦を迎えた。阿倍野あたりから、乞食が毎日の様におわんを持って来ていた。線路際の野菜類はことごとく盗まれていた。

岡山では国民学校の生徒として、校庭で退避訓練、兵隊さんに感謝協力のこと、手旗信号練習等々、生活でも友達同志喧嘩をすると、「この道はあんたの道でない。天皇陛下の道よ」と言ったり、天皇という存在が子供心に叩きつけられていた。

大和の小学校では、若い先生が作った歌を歌わされた。

「朝露ふんで たんぼ道

両手をつないで学校へ

歌うぼくらは 自由と平和の新しき

希望に向かって日を送る——」

三年生であった私は、これから良い事が起こってくる、悲しいが希望があるのだなと感じていた。戦後、新聞で天皇、皇后の写真を見る時、当時の記憶が重なり、生きて居られるという事が不思議に思っていた。

神聖にして冒すべからずの時代は終り、古代国家からの歴史を讀む時、貴族権力者外の民衆の過酷な強制労働、むごい租の取り立て、哀れな古代の民衆、平安の唐の政治、文化の模倣、現在は亡びた唐国のそれ等を理想とする方々はあるが、様々な歴史の変遷を経た今日の時代、主権在民の立派な憲法を、後ずさりする事のない様に守り抜いていかなければならないと思います。

